

議 事 録

会議名	第1回 葛飾区認知症施策推進計画策定等検討委員会	
事務局 (担当課)	葛飾区福祉部高齢者支援課	
開催日時	令和7年1月9日(木) 19時から20時20分	
開催場所	現地出席とオンライン出席による開催 現地会場：かつしかエコライフプラザ 研修室	
出席者	委員	30人
	事務局	高齢者支援課長 高齢者支援担当係長 相談係職員2名
会議次第	<p>1 開 会</p> <p>2 議 題</p> <p>(1) 葛飾区認知症施策推進計画策定等検討委員会について</p> <p>(2) (仮称) 葛飾区認知症施策推進計画の策定及び認知症への理解促進に向けた条例の制定について</p> <p>(3) 「認知症に関する意識・意向調査票」調査項目の検討について</p> <p>(4) その他</p> <p>3 閉 会</p>	
資料	<p>資料1：葛飾区認知症施策推進計画策定等検討委員会委員名簿</p> <p>資料2：葛飾区認知症施策推進計画策定等検討委員会設置要綱</p> <p>資料3：(仮称) 葛飾区認知症施策推進計画の策定及び認知症への理解促進に向けた条例の制定について</p> <p>資料4：認知症施策に関する国・東京都・葛飾区の動き</p> <p>資料5：認知症を取り巻く状況</p> <p>資料6：認知症に関する意識・意向調査票(案)</p> <p>参考資料1：共生社会の実現を推進するための認知症基本法</p> <p>参考資料2：認知症施策推進基本計画</p>	

議 事 経 過

1 開会

福祉部長の挨拶の後、委嘱状案内、情報公開の件、資料確認、委員の紹介、区職員等の紹介を行った。

委員長・副委員長選出を行い、委員長、副委員長から挨拶の後、議題は委員長により進行した。

2 議題

(1) 葛飾区認知症施策推進計画策定等検討委員会について

事務局から、資料2「葛飾区認知症施策推進計画策定等検討委員会設置要綱」について説明した。委員からの意見、質疑は無かった。

(2) (仮称) 葛飾区認知症施策推進計画の策定及び認知症への理解促進に向けた条例の制定について

事務局から、資料3「(仮称) 葛飾区認知症施策推進計画の策定及び認知症への理解促進に向けた条例の制定について」、資料4「認知症施策に関する国・東京都・葛飾区の動き」、資料5「認知症を取り巻く状況」について説明した。委員からの意見、質疑応答は次のとおり。

(副委員長) 認知症を取り巻く状況について、渋谷区、立川市、清瀬市などの計画策定に関わっています。統計の出し方としてぜひ今後検討していただきたいのは、85歳以上の状況です。もちろん推計からも必要ですし、あと世帯や、そして何より要介護度の中での比率です。というのも、皆様ご存知かと思うのですが、認知症の有病率は85歳以上になると急に上がっています。それが今後どのように推移していくかというのが、確実に介護サービスあるいは地域づくりということに無視できないものでもあるため、年齢が入ってくる表には、85歳以上の人ほどだけいるのか、どういう状況かということが分かるようにしたほうが良いと思います。もう1点は、なかなか自治体では難しいのですが、どの自治体でもそうなのですが、区内の地域間の格差がないかどうか。格差というのか、やはりエリアがかなり独特だと思います。葛飾区に住んでいないので、よくわからないところもありますが、区全体の地域を考えるのも大事だと思います。同時にそれぞれの地域特性というものが持つ力もあると思うので、どういう出し方がいいか、どの自治体も手探りだと思いますが、地域という軸を見て、生活圏域がいいのかどうか難しいところだと思うんですけども、分析とか実態を出していったほうが良いと思いました。

(委員) 8ページの認知症サポーター養成講座ですけれども、実際にサポーター養成

講座を受けました。その後、受けた方々が実際にサポートする、そういう経験、場というものはあるのかどうか教えていただきたいです。

(事務局) まず、副委員長からのご質問について、年齢、地域などをデータで見ただいて、今後どのように推移していくのか、また、地域間の格差など、地域の捉え方について、また事務局で考えさせていただきます。世帯や介護認定の度合いにつきましては、第2回目でそういった部分をクロスさせてデータが提供できればと考えております。それから、今ご質問いただきました認知症サポーター養成講座ですが、サポーター養成講座を受けていただいた後に、サポーターの方のスキルアップ講座ということで、様々なテーマをご用意して受けていただく講座もやっております。ただ、サポーターが活躍する場につきましては、今のところ明確に整理ができていないので、この部分については区としても課題だと思っています。きちんと考えていきたいと思っています。

(委員) キャラバン・メイトの世話人をやっています。キャラバン・メイトということで、葛飾のメイトさんも非常に頑張って、認知症サポーターの講習会を開いてくれています。葛飾区で予算を組んでもらい、補助教材というのを作りました。教材には、認知症の講習会を終えた方々に対して、何の目的で講座に来たかという質問が書いてあります。例えば知識を得たいから来たという方にはまた手を挙げていただく。ボランティアとして活動したい方の場合には、葛飾には認知症カフェがありますとか、何々ボランティアがありますと、次にどこへ行ったらいいかというのがちゃんとご案内できるような補助教材が出来上がっています。ただ、コロナの関係で、どうしても講習会が開催されなくて、その補助教材が今まで上手に使えていませんでした。これからは、補助教材をきちんと使って、サポーター養成講座を受けた方々が次に行けるステップをご案内できる準備はできています。

(委員) 私ども、NPO法人でシニアの集まりをやっています。シニアの居場所として、シニア活動支援センターの地下で色々なイベントをしたり、区民の方に来て遊んでいただいています。ここにいらっしゃる委員さんや先生、包括の責任者の方に認知症サポーター養成講座をやっていただき、延べ1000人近く受講されました。その中で、私自身がこの講座を受けて実際に行動したのは3例あります。シニア活動支援センターに来る人で、どうもこの人は少しおかしいなという、そういう目を養成講座で学んで、青戸や水元の包括に連絡して、その後は対応してもらおうという、そういう繋ぎ役というのをやっています。ただ、コロナでしばらくそういうこともできなかったので、これからもやっていかなければいけない。そういう意味で、サポーター養成講座で認知症の方を見る目、見分ける目というものを養うことは非常に大事だと思って、実際に数例成果を得ています。

(3) 「認知症に関する意識・意向調査票」調査項目の検討について

事務局から、資料6「認知症に関する意識・意向調査票(案)」について説明した。委員からの意見、質疑応答は次のとおり。

(委員長) ここで、認知症の方ご本人やご家族から認知症に対する理解や、思い、ご意見などをお話しいただければと思います。

(委員) 私は外に出て体を動かしていることが多いです。家にこもるのではなくて、人と接するのがやはり一番いいのかなと思います。今は週3日グランドゴルフをやって、ラジオ体操は毎日行っています。そんなふうに、人と接することが一番重要かと思います。

(委員) 私は母82歳を見守り介護という感じでやっています。介護、見守りをしていて、やはり曜日などを何回も聞くということが増えてきていますので、そういうところをデジタルカレンダーやホワイトボードを使ったり、本人が動くところどころに分かりやすく書いたりしています。あと、最近、AIのスピーカーを買いましたらとても活躍してくれています。今日は何の日だっけ、今日はどっか行く日だっけとか母が何回も聞いてくることを、私も余裕があれば「今日は何曜日、今日は燃やすゴミの日よ」と答えられるのですが、去年の11月ぐらいに、私もだいぶ溜まってきたのだと思うんですけど、だんだん声も強くなったりすることがあって、その時に、AIスピーカーを導入したら、同じことを何度も聞いても、同じ感情で答えてくれるというのを体験して、とてもいいものだと思います。なので、介護というのは、工夫次第で、なんとかやりくりできるのではないかと考えています。

(委員長) ありがとうございます。そのAIスピーカーというのは、テレビ電話みたいなものですか。

(委員) はい。私は同居しているので、見守りカメラなどは必要ないのではないかと考えていたのですが、なんでもやってみようと購入したら、本当にいいです。

(委員長) 顔が見えるような形でやってらっしゃるということですか。

(委員) 同居しているので、カメラ機能はほとんど使ってないのですが、カレンダーで予定表を入れたり、薬を飲みましたかと聞いてくれたり、音感知があるので、夜、咳をしていたらAIスピーカーが大丈夫ですかと言ってくれる、そういう機能を使っています。そうすると本人も次の日、「すごいんだよ、心配してくれた」というふうに言います。全部自分が登録しているのですけれど、「よかったね」、「本当になぜわかるんだろう」「きっと、お母さんのことを見守っているんだよ」という話をすると、少し安心しているような様子が見えたりします。離れていて使うものだと思っていたのですけれど、同居していても使えると思いました。

(委員) 先ほども触れましたけれど、高齢者総合相談センターと連携して、NPO法人として、認知症に対する知識を得よう、教えてもらおう、そして認知症の方との接し方を学ぼうということで認知症サポーター養成講座をずっとやってきま

した。いろんな人に、優しく接しなくてはダメだと、諭すように言っていたんです。ところが、去年の秋ぐらいから妻が認知症になったんです。その前に少しおかしかったのですが。そうすると、優しく見守ろうと言っていたのに、委員さんが先ほどおっしゃったように、怒鳴ったりはしないけれども、声が荒くなってしまいうんです。今まで私が皆さんに教えていた、優しく接してくださいと、優しく見守るんですよ、ということは、全くもう空絵事みたいになってしまいました。半年ぐらい経って少しずつわかってきたのですが、今言ったことを全然やってくれないということは、やらないのではなくて、忘れているのですね。だから、言っても無駄と言ってはいけないかもしれないですけど、そんなものだと思えば別に怒りも出てこないし、また本人もそれなりのできることをやってくれているので頑張っています。今までやっていたNPO法人の仕事もほとんど辞めまして、24時間家にいることが多いです。3食のご飯は私が作っています。そういうことも妻がもうできなくなってしまったんです。ただ、普通の会話については全然おかしくないの、友達とか周りの人と、平気で普通の話をしています。その辺は認知症とわからないのですけれども、医師に家事のことも相談すると、奥さんは今までずっと作ってきたのだから、今度はご主人の番でしょうと言われて、それぐらいのつもりでやりなさいと言われてたりして、半分諦めです。ただ、一つ気が付いたのは、私はたまたまNPOの仕事上、高齢者総合相談センターや医師とお付き合いしていて、繋がりがあったので、妻が認知症かなと思った時には、すぐ相談するところがありました。私の場合には、高齢者総合相談センターの所長とか、あるいはケアマネの方を紹介されて、何の苦労もなくそういう環境に入れました。こういう体験談を周りに話していると、家族が認知症になった時にどう介護するかとか、そういうことは色々勉強したり、資料はあるのですけれども、どのような処置をしたらいいかということは全く皆さん知らないのです。高齢者総合相談センターに相談に行こうという人も非常に少ないですね。行っても事務的な対応されてしまったという人もいます。私はたまたまこういうことを20年近くやってきたので、繋がりがあって、親身になってお世話してもらい、しかも私自身もそれがわかっているからいいのですが、それがこれからの大きな課題になると思います。介護するのはいいのですが、認知症みたいだなと思った時にどこに行ったらいいんだ、どうしたらいいんだということ。施設に行きますと、要介護度やレベルによってピンからキリまであります。見学に行けと言われても、どこに行けばいいかわからないし、何を聞いていいかわからない人がほとんどだと思うんです。ですから、そういうことを、高齢者総合相談センターあるいは高齢者支援課の方、そういう方が積極的にアプローチしてくれる環境がほしいと思います。皆さんは何も知らないんです。しかも、関心がないです。自分の家で、認知症が出るなんてことはなかなか考えないです。なってみなければわからないということが実感です。本当に大変です。

(委員) 家族の立場で追加です。今おっしゃられたように、家族が認知症ですと言われた時の驚きっていうのは、今にして思えば落ち着いてできるでしょうが、言われた時は一瞬にして自分の生活が変わってしまったところから始まりました。私が本当に感じたことですが、もう普段の生活ができなくなるのではないかと、自分で勝手に、主人はもう何もできないのではないかとという思いがありました。最初に何をしたかという、高齢者総合相談センターに相談するというのもあったのですが、まずは免許を取り上げないと危ないのではないかと、運転できないという目で見ているので、万が一乗ったりしたら危ないんじゃないかというところから、最初に車を手放したということから始まりました。実際にいつ発症したというのはわからないんです。家族が一番わからないというのが、まさに私だったんです。会社の先輩方などは、少し気になっていたけれど、奥さんに直接言っているものかどうかと思っていたということの後から聞きました。そうした時に、一番自分を責めてしまったということがあります。しっかりやってくれているだろうと。私は私で働いて頑張ってきていたから大丈夫だろうという思いでいたのですが、これが全く違っていた。第三者の方が言ってくださるというのは、難しいことなのかなと。家族としてわからなかった自分というのを、最初はすごく責めてしまったのですが、そうもしてられず、かれこれ、3年ほどになりました。主人も夜など気分が落ち込むことがあると思いますが、本人の意思も傍で見守るといえるところですので、段階が進んでいけば、本人の行動も変わります。それに対して、見ている私も勉強して、こうなったのだったら、じゃあ、今度はどうしようかと、こちらも勉強させられている。相手が進化していけば、それに合わせて、自分も少しでも勉強させられている。2人家族ですから、笑ってなんとかやっていますが、24時間一緒というのは、きつくなってきたものがあります。いろんなものを利用すればいいのしょうけれども、相手に合わせて、自分も勉強して、進化してというところがあります。長くなってすみません。主人は散歩に行きますが、何時に帰ってくるようにと言っても、時間が守れないので、手にマジックで何時に帰宅と書いて散歩に行きますと、大体その時間で帰ってきます。ここのところ寒くなりましたので、手袋をして散歩に出かけるようになりました。時間を過ぎても帰ってこないの、どうしたのかなと思ったら、手のひらに書いて、手袋をしていったわけですから、本人は目にできませんでした。では、どうしようかと考えて、今は手袋をして、その上にビニールテープを貼って、何時に帰宅と書いたら、大体帰ってきています。自分でも、これがダメだったら、ではどういうふうにしたらうまくできるかなというところを、主人の大好きな言葉ですが、試行錯誤で、毎日が試行錯誤でやっています。調査の配布についてですが、葛飾区報に事前にこういうものを実施しますと載せるようなことは予定されているのか、それとも全く何もなしで突然各お家に配布されるのか、その辺はどのようになっているのでしょうか。

(事務局) こちらの調査を実施する前には、広報かつしかで、「調査を実施させていただきます。届いたらよろしくお願ひします。」という周知はさせていただきます、また、ホームページにも掲載させていただく予定です。

(委員長) 私から一つ、区を取組のところにGPSの貸与と書いていないのですが、葛飾区ではやっていますか。

(事務局) GPSの貸与について、購入するときの助成等はやっています。ここに全ての区を取組を書くと長々となってしまいますので、少し縮小させていただいた内容になっています。

(委員長) もちろん高齢者総合相談センターなどでもGPS支援があるというご説明はあるわけですね。

(委員) 必要な方にはしています。

(副委員長) これから調査をやるということで、ぜひ調査項目として検討したほうがいいと思うことがあります。今回の取組というのは、認知症基本法がきっかけの一つで、それを踏まえた条例というのがポイントだと思います。基本法は、オレンジプランなどとかなり変わってきたところがあり、例えば、15条でバリアフリーという言葉を使っています。16条では社会参加という言葉も使っています。先ほどお話がありましたけれど、徐々に孤立しがちだったり、人との繋がりや交流が減りがちだったりするということを変えていこうということで、サポーター養成講座が始まった当時から比べると、介護のサービスを充実するという話と、少しシフトが変わってきているところがあります。そうすると、外出するとしたら、どんなところに外出しているのか。これはご本人にお伺ひすることだと思いますが、楽しみにしていることとか、不安の話はわかるんですけども、認知症になって、それまでやっていたことで楽しみにしていることができなくなったとすると、もう1回やってみたいと思うようなこととか、そういう前向きな質問があってもいいのではないのでしょうか。あと、地域の中の居場所で、認知症カフェや様々な介護保険サービスがありますが、そこだけではないと思います。本当は行きたいところとか、今まで行っていたところ、将棋クラブに行っていたけれど、もう来ないでくれと言われて行かなくなったとか、そういうことがあるかもしれない。そういうところで行きたいところをもう少し見えるようにしたほうがいいのではないかというのが一つです。あと、先ほどから話がありましたAIの話とか、今もお話いただいたような、ご家族がやられている工夫がいっぱいあると思います。支援の話で、不安なことを聞いていくことも大事かもしれないけれど、今やられている工夫やチャレンジしていることなど、前向きに頑張っていることも拾い上げて、それをまた施策の中に盛り込むこともできると思うので、その辺りでしょうか。結局葛飾はどんな地域づくりをしていきたいのか。認知症があっても葛飾区に住んでいたいと思えるような地域づくりはどうやってやるのだろうかというのを聞いた時に、今の魅力を拾いとるほうがいいと思います。そ

れと、根本的な話ですが、他の自治体でもこういうニーズ調査とか計画のときに手伝ったりしていますが、1ページのところが字が多すぎるので、調査ご協力のお願いはこんなにいっぱい書かなくてもいいと思います。見た瞬間に書くのが嫌にならないようにするには、できるだけ文字は少なく、大きければいいのですが、自治体では、これを説明しなければいけないという言葉で丁寧に全部盛り込んでいるのだと思いますが、読む側に立つと、ぜひ協力してくださいということが単純にわかればいいのではないかと思っています。1ページは、もう少し工夫があったほうがいいと思いました。

(委員) このアンケートを見たときに、とても黒い字で大きくて、私も区民ですが、恐怖を感じるような圧迫感を感じました。個人的な感想ですが。そして、認知症がとても悲しくて辛い病気という印象を持ってしまうような一部の表現を感じました。先ほど副委員長がおっしゃったように、私も、軽度の認知障害の方でも地域で仕事を続けられる環境づくり、あるいは社会づくり、地域づくりが必要だと思います。今、実務におきましても、軽度の認知症の方から重度の認知症の方々まで関わらせていただいています。地域で役割を持って生活を続けること。今の状況ですと、カフェ活動やボランティア活動に参加、家族会に参加というものがありますけれど、その認知症家族会とか認知症オレンジカフェとか、その頭に「認知症」はいらぬですね。地域の家族会や、地域の皆さんのお茶飲み会でいい。頭に「認知症」という題目がつくことが、ご本人にとってはとても尊厳を傷つけられるものではないかというご意見も区民の方、認知症のご利用者様から出ているところです。また、認知症の方を介護していらっしゃる家族支援の部分でも制度がどんどん変わってきて、認知症のご家族の支援の部分もかなりクローズアップされてきているところです。やはりアンケートにおきましても、そのご家族の方の部分も、区民の方々に意識を持っていただきたいということで、触れていただくのはいかがかなと感じました。

(委員) 調査項目自体への意見ではないのですが、色々出していただいた意見も含めて、盛り込んでいくとどうしてもボリュームが大きくなってしまおうと思うのですが、一般区民の方がそれにどこまで答えてくれるのかという不安も一方であります。ぜひ答えていただきたいのですが、今回は幅広く取っているのです。特に、普段認知症に全く関心がない人にも答えていただきたいところではないですか。このままだと関心がある人しか答えていただけない可能性が高くなってしまおうと思うので、答えると抽選でプレゼントのような、行政ができる範囲のことでどんなことができるかわからないのですが、答えることで特典があると回収率が上がるような、認知症に関心がなくとも答えようと思えるような、モチベーションが上がるような工夫が何かできないかなと思ったところです。せつかく、どこの自治体もやってない、葛飾区が頑張っていてやってみようというところ、これだけの方が集まって、項目も練ったところで、回収率が低く出てしまおうと、す

ごく残念だと思うので、ぜひ、ご検討いただけたらと思いました。

(福祉部長) 私たちがこの調査票を作るときに、先ほど委員からお話があったように、作っていくうちにネガティブな部分が非常に多いと感じて、もう少し前向きにならないかというのは感じていました。ですが、いい項目が浮かばなかったし、やらなければならない部分もあったので、一応こういう形で作りましたが、それを心配しながら作ったというところがありました。ご指摘はよくわかりますし、まさしくそういう点は、皆さんから色々ご指摘をいただきたいと思っています。今お話いただいた中で、できれば、具体的に、ここはこういうイメージになってしまいますということ、この場ではなかなか尽くせないところがあると思います。後ほど、事務局に具体的にこの項目についてはこう思うというご意見をいただければ、それに合わせて修正をかけていきたいと思っていますので、ご協力をいただければと思います。また、副委員長からお話があった、外出先や楽しみにしていること、介護者の方たちが今現在工夫している点というところについては、この調査票に盛り込まれる部分もあるでしょうし、また個別のヒアリングの中で捉えていくこともできると思いますので、そういった工夫をしながら総合的に実態を把握していきたいと考えています。あと、インセンティブというところは非常にハードルが高いと思っています。ただ、お話は承りました。何かできるかどうか、一応検討させていただきたいと思っています。1 ページ目については、確かにご指摘の通りですので、なるべく少なくしていきたいと思っています。

(委員) 個別にということ、問16の「認知症には種類(アルツハイマー型認知症、血管性認知症、レビー小体型認知症など)がある」について、パーセントは少ないということですが、私の知り合いや家族で、前頭側頭型認知症の方がいるので、入れていただきたいと個人的に思います。お話を聞きますと、症状の出方などがアルツハイマー型とは全く違って、まだ研究や対処法が他の認知症の症状と比べると難しいと聞きます。前頭側頭型認知症をぜひとも入れていただきたいというのが要望です。

(事務局) 事務局としても、今いただいたご意見、それから他の方からもいただいた意見につきましては、どのように反映させていくか、しっかりと検討させていただきますので、お預かりさせていただきます。ありがとうございます。

(副委員長) 具体的にということ、居場所という、漠然とした言葉ですが、この区内でどんなところが居場所になるか、認知症になっても行ってみたい場所がわかるように何かあったらいいと思っています。というのも、私の知人で、最後は認知症になって、その時にNHKスペシャルでもやって、私も手伝ったりしました。娘さんも言っていたのですが、デイケアを始めたけれども、ご本人自身がデイサービスはつまらないとおっしゃっていて、ではどうしたいかと聞くと、クリスチャンなので、教会に行って静かに本を読んでいたとおっしゃっていたそうです。まず初めに、デイサービスありきでなくてもいいのではないかと思います。

また、ご本人が一番リラックスしていたのは、いつも行く喫茶店があって、馴染みの椅子とかスペースがあって、そこに座って窓の外を眺めるのがすごく好きだとおっしゃってたりして、個人個人みんな違う話だけれど、この葛飾区内でいろんな居場所になるような施策とか、そういうのが組めるといいと思います。外出先や居場所とか、そういうような近いもの、ご本人に答えてもらうのか、あるいはそれ以外での、皆さんに答えいただくのは難しいですけど、検討していただけたらと思います。

(委員) コロナの年の2月までカフェを運営していました。立派なカフェではなくて、どなたでも出入りできる看護師さんのいる事業所の下で、サンドイッチなど食事はできないけれど、安心してお話ができる場所というものを運営していました。コロナと同時に閉じることになってしまったのですが、その時に通っていた平均85歳ぐらいの方々が、5年経ってもまだ元気で外を歩いていらっしゃいます。最近、家に入れなくなったというひとり暮らしの方から会社にかかかったり、直接きたりします。鍵をなくしたというので、どんなふうになくなったのか、スタッフが朝からの動きを聴きながら、朝出かける時にスーパーの袋にゴミを入れて、ゴミ置き場に捨てる時に、一緒に鍵も捨てたみたいだというやり取りをします。その方は自分が忘れ物が増えてきたことに気づいているか気づいてないかわからないけれど、ただ相談するところはここだと決めているということだと思います。ここに載っている居場所だけではなくて、もう少し開けた、いろんな人が出入りできて、それが毎日の安否確認のような習慣性を持てるような空間にするのであれば、そこに信頼できる方がいて、何かあったら助けてもらえる可能性もあるし、そこから発展して次にステージが待っている場合もあるんだけれども、そういった関係性が必要だと思います。特におばあちゃんたちの友情は強くて、自分たちが元気で足腰がしっかりしている限りは、介護保険や公のサービスにヘルプを求めるのではなくて、危なっかしいけれどお互いに助け合っている状況が多いというのを実感していますので、そういったところに居心地のいい人をきちんとあてがうとか、そういう空間の中から一緒に考える時間と空間ができたらちょうどいいのかなということも感じています。

(委員長) 他によろしいでしょうか。それでは、本日の調査項目の検討についてはこれで終了させていただきます。今後のスケジュールを含めて、この調査票についてどのような検討を進めていくか、事務局からご説明をお願いいたします。

(事務局) 本日、様々ご意見をいただきましてありがとうございます。本日いただいたご意見を踏まえまして、事務局でまとめさせていただきます。第2回の検討委員会で報告させていただきますので、よろしくをお願いいたします。また、本日の資料や調査項目につきまして、他に何かお気づきの点等ありましたら、事務局にメールや電話でご意見をいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(4) その他

(委員長) 本日の検討委員会で予定しておりました議題は全て終了しましたが、委員の皆様から何かございますか。全体を通してよろしいですか。それでは、最後に、事務局から事務連絡として、今後の予定をお願いいたします。

(事務局) 次回の検討委員会についてご案内をさせていただきます。第2回の検討委員会は、2月12日水曜日19時から、場所はウェルピアかつしかでの開催を予定しております。改めて開催通知や資料などの送付をさせていただきますので、ご出席いただきますよう、どうぞよろしくをお願いいたします。

3 閉会